

協議会資料－《H27 年度近江ウェットランド研究会の取り組み》

《2015年度の取り組み状況》

春～初夏期には、県自然環境保全課の調査に協力して、主として南湖西岸のオオバナミズキンバイ・ナガエツルノゲイトウの生育状況調査を進めた。

夏以降は、県自然環境保全課と協力して、これまで網羅的な調査を実施していなかった北湖と周辺内湖について、ナガエツルノゲイトウとオオバナミズキンバイの生育状況調査を実施して、多くの地点で新たな生育地を確認した。その間、必要に応じて、地元市町や関係諸機関・団体に最新情報を提供するとともに、高島市(針江地区周辺)と米原市(蓮池)においては現地案内と共同駆除作業に取り組み、長浜市(早崎・南浜)においては現地案内と共同視察を実施した。また、彦根市域においては、彦根市役所や関係諸機関・団体と協力して、宇曾川・彦根野田沼などにおいて、共同駆除作業に取り組んだ。

《2016年度以降の取り組み》

これまでの活動を継続することは当然であるが、とくに今年度の調査で外来水生植物の侵入状況の全容がほぼ明らかになった北湖本湖と周辺内湖・河川・水路については、継続的な調査を進めるとともに、関係諸機関と協力して、現状以上の拡大を抑制するための方策を検討する。

本研究会は発足以来、琵琶湖周辺地域の在来植物相の保全を大きな研究テーマにしてきたが、今年度の調査によって、北湖周辺において絶滅危惧種を含む在来の植物相が健全に維持されてきた地区へのナガエツルノゲイトウの侵入が認められた場所が少なくなかったことから、こうした観点からも取り組みを強化したい。

《これまでの取り組みの概要》

(1) ミズヒマワリ生育状況調査と駆除活動の展開

2007年に琵琶湖水系への侵入が確認されたミズヒマワリについて、継続的な生育状況調査と30回以上に及ぶ駆除イベントを開催するとともに、「見つけたら、その場で駆除!」という基本姿勢で定期的な監視と緊急駆除活動を数年にわたって継続してきた結果、琵琶湖本湖においてはミズヒマワリを根絶に近い状態に追い込むことに成功した。

(2) ナガエツルノゲイトウ生育状況調査と駆除活動の展開

2007年に琵琶湖水系での繁茂拡大が顕在化したナガエツルノゲイトウについて、当時分布情報のなかった北湖南西部や南湖沿岸各地において、生育状況調査を展開。次々に新たな生育地を発見し、数回の駆除イベントを主催した。その後は、滋賀県自然環境保全課や環境科学研究センターなどと協力して、琵琶湖水系の各地において継続的な調査を続けている。

(3) 小冊子「琵琶湖辺域の外来植物と貴重植物」刊行への協力

2010年3月に琵琶湖環境科学研究センターから発行された小冊子「琵琶湖湖辺域の外来植物と貴重植物」の作成に際して、一部の本文執筆を担当するとともに、多くの写真を提供した。

(4) オオバナミズキンバイ生育状況調査と駆除活動の展開

2009年12月に赤野井湾の本湖岸でオオバナミズキンバイの生育を初確認。2011年後半に

なって、赤野井内湾部(小津袋)や木の浜南部ヨシ植栽地などへの新たな侵入と急速な分布拡大を確認して危機感を強めたため、県自然環境保全課・琵琶湖博物館等の関係機関と連絡をとり、2012年4月に最初の現地説明会を開催。さらに5月には神戸大の角野康郎教授(日本の水草研究の第一人者)を招いて合同視察会を開催し、6月には最初の駆除イベントを開催した。その後も滋賀県自然環境保全課や琵琶湖環境科学研究センターと協力して、生育状況調査を続けている。

(5) 関係機関や他団体との情報共有・協力関係の推進

一連の現地調査や駆除活動を通じて、多くの関係機関や団体との協力関係が生まれ、分布情報配信などを通じて、「情報センター的な役割」を担ってきた。

本研究会が主催したイベントを契機として、これまで殆ど連絡のなかった機関や部局同士に新たな交流や連携が生まれた例も少なくない。琵琶湖水系からの外来水辺植物根絶に向けて、多くの関係機関・団体が共同歩調を歩み始めたことは、大きな前進と考えている。

《関係機関》

滋賀県自然環境保全課

滋賀県琵琶湖環境科学研究センター

滋賀県水産課

水草研究会

大津市

草津市

守山市

東近江市

彦根市

環境省近畿地方環境事務所

国土交通省琵琶湖河川事務所

(独)水資源機構琵琶湖開発総合管理所